

敗戦の現実

久留米市 柳 ムツエ

太平洋戦争のさなか、結婚と共に朝鮮民主主義共和国（北朝鮮）興南に渡り、夫は日本窒素火薬株式会社の保安係へ。私は同じ会社の濃縮係（硫酸）の事務員として働いていた。

昭和20年2月、夫に赤紙召集令状が来た。入隊先は日本海に面した鴨祿江近くの羅南110部隊だった。その後2回夫から便りがあったが、それっきりブツツリ来なくなった。

7月に入った。戦争の雲行きは悪くなり内地との便りも不通。故郷帰還も出来なくなった。会社の方も機械の部品や重大な書類など疎開し始めた。警戒警報も毎日のように出され、私たちは仕事どころではなくなった。

8月12日の夜、日本海の方からソ連国の爆撃機が何十機も編隊をなし、大きい音を響かせて私達の上空にやって来た。爆撃機の赤い灯りが転々と空にちらばって見える。日本海上をぐるぐる何回も回転しながら、火の玉を次々と海へ落としていった。しかし、側にある火薬工場や密集している社宅の上空も何回か廻ったが、爆弾は1個も投下しなかった。最後に1発、人家のない海岸に落として北方に向かって飛び去った。13日、14日警戒警報もなく私たちは安心してた。まさか無条件降伏の日が目の前にあるとは知るよしもない。

8月15日、この日は澄み渡った良い天気であった。私は平常通り事務をとっていた。

11時頃、係長が濃縮係全員へ「お昼に重大ニュースの発表があるから事務所に集合するように」と言われた。私たちは早目に昼食をすませ、日勤者、昼勤者全員事務所に集まった。それぞれの責任者が3階建ての広々とした濃縮工場にある大小の機械のスイッチを切った。特に一番大きい機械は創立以来、1日も休みなく昼夜ぶっ通し働き続け、濃縮係にとって最も重要な機械であった。それが止まったのである。これはただごとではない。嫌な予感が体中に拡がった。

12時、昭和天皇の悲痛なお言葉が放送され、私たち日本人は泣いた。その時である。どおっという喚声をあげて朝鮮人の工員達が万歳、万歳と叫びながら事務所の外へ走り出して行った。私たち日本人は呆然と彼等を見るだけであった。

本部事務所より「今から係長以上の緊急会議がありますから、係長すぐ本部まで来て下さい」と電話がかかってきた。係長は急いで本部の会議室へ行った。

夕方になって、やっと係長が力なく事務所に入って来られた。「皆さん、御存知の通り本日12時、無条件降伏で戦争は終わりました。（中略）ソ連の命令でしょうか、早速この会社を現状のまま、朝鮮側に渡すように社長に直接命令したそうです。社長は残念だったが仕方なく、『残務整理があるから終わり次第朝鮮側に引き渡します』と言われたそうです。そこで皆さん2、3日出勤して残務整理を手伝って下さい（後略）」係長の両眼から涙が一すじ二すじ流れ落ちる。私達も声をあげて泣いた。日本人にとって一生忘れることのできない、長い長い一日

であった。

翌日会社へ出勤した。事務所勤務の者は、机の中、ロッカーの中、戸棚の中などの燃える書類は空き地でどんどん焼却した。不燃物は土地を深く大きく掘って次から次へ捨てた。工場勤務の者も、工場内の燃える物、燃えない物を外へ運び出し、燃やしたり捨てたりした。事務所も工場内もガランとなった。ソ連将校や朝鮮人の上役らしい人が、私達をじろじろ眺めながら監視している。そして時々、係長に何か話しかけている。係長も頭を下げて返答している様子。私達もその上役とすれ違った時は、軽く頭を下げざるをえなかった。戦争に敗れたものは惨めなものだ。こんな立派な会社を1週間後にとられてしまう。しかし、それが敗戦の現実であった。

9月、突然社宅立退き命令が下る。収容場所は約6km離れた雲南地区。窒素火薬会社が建てた朝鮮人独身寮である。3日後私はモンペと地下足袋姿で玄関に立った。

8時出発。最少限度の世帯道具と当分の食料品、衣料品など、一遍に運べないので行きつ戻りつしながら、少しずつ前進して行った。皆、真剣である。昼食休憩する者は一人もいない。太陽の直射を受け、皆汗みどろになって蟻の這うように一生懸命運んだ。日本人5000名以上。移動する光景は延々と続いた。寮の広場に全員着いた時は6時過ぎだった。くたくたに疲れた体を各々の荷物にもたれながら、入居命令を待っていた。

その時、1台のトラックが音もなくすうっと広場にやってきた。ソ連兵が10名以上車から飛び降り、片っ端から今やっと運んだばかりの行李やトランクやリックサック等、どんどんトラックの中に投げ入れる。日本人は驚いて騒いだが、彼等は自動小銃をむける。どうすることもできなかった。トラック一杯になると、アツと言う間に逃げてしまった。責任者が慌てて朝鮮側に交渉され、薄暗くなった頃、やっと部屋に入ることを許された。

寮は4棟あり、寮内の構造は皆同じである。中央に出入口があり、両方に長い通路が2本。その両側に6畳間がずらりと並び、1部屋に6名平均で収容された。私は全然面識のないAさん一家と同居することになった。私は一人。部屋の一隅に陣どって暮らすことになる。

初日の夜、ソ連兵十数名、剣突鉄砲や自動小銃を持って寮内に侵入した。戸締りの悪い所は靴のまま入り物品を奪う。女がおれば老若にかかわらず暴行する。敗れた日本人の男子は、どうすることも出来ず、ただ見ているだけであった。翌日、私達若い女は全て丸坊主の頭になったり、男子のように断髪した。

11月下旬、本格的な猛吹雪が続く。酷寒と不衛生と食糧不足によって感冒、栄養失調、発疹チフスで、ばたばた死人が続出した。男4人で遺体を戸板に乗せ、約4km離れた指定の場所まで運ぶ。底には大きい深い穴が掘ってあり、その中に遺体を投げ入れるのである。積み重なった遺体の上に、容赦なく粉雪がちらちら降り積もる。花もなければ線香もない。家族の者もない。哀れな葬式である。

若い人よ。戦争は二度と繰り返してはならない。これが敗戦国の現実だから……。